

大阪狭山市文化財報告書19

府道河内長野美原線歩道工事にともなう
狭山藩陣屋跡発掘調査概要報告書Ⅱ



2000年3月

大阪府富田林土木事務所
大阪狭山市教育委員会

府道河内長野美原線歩道工事にともなう
狭山藩陣屋跡発掘調査概要報告書Ⅱ

2000年3月

大阪府富田林土木事務所
大阪狭山市教育委員会

序 文

大阪狭山市内には大阪府の史跡名勝に指定されております狭山池をはじめとして、数多くの文化財があります。大阪狭山市教育委員会では、このような文化財の保護をはかるため、市内の発掘調査を継続的に実施してまいりましたが、平成10年度からは大阪府によって施工されている府道河内長野美原線の歩道設置工事に伴いまして狭山藩陣屋跡の発掘調査を実施しております。本報告書はその2年目の成果をまとめたものです。

調査の結果、近世の陣屋の大手筋周辺の状況が少しづつではありますが明らかになってきております。本書がわずかでも各分野における研究の一助となれば、まさに望外の喜びです。本年度の調査におきましても、調査地周辺の皆様方には多くの協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。また今後とも本市の文化財保護行政に対するご理解とご支援のほどを、よろしくお願ひ申し上げます。

平成12年3月

大阪狭山市教育委員会
教育長 岡 本 修 一

例　　言

1. 本書は大阪狭山市教育委員会が大阪府富田林土木事務所と委託契約を締結し、実施した府道河内長野美原線の歩道設置工事に伴う発掘調査の成果をまとめた概要報告書である。
2. 収録した調査は以下の通りである。
　　狹山藩陣屋跡 99-5 区
3. 発掘調査は平成11年10月より、工事の進捗にあわせて断続的に平成12年3月まで実施し、整理作業もこれと併行して行なった。
4. 現地調査は大阪狭山市教育委員会生涯学習推進課の市川秀之が担当し、同課谷義浩がこれを助けた。整理作業、報告書作成については市川秀之が担当し、橋本和美、山崎和子、笛岡裕里子、若宮美佐、永橋千代子、山林久仁子、川上多江子をはじめとする皆さんの協力を得た。また遺物の写真撮影は阿南写真工房の阿南辰秀、伊藤慎司両氏に依頼した。

本　文　目　次

序 文 大阪狭山市教育委員会教育長 岡本修一

例　　言

1. 調査にいたる経過	1
2. 遺跡周辺の環境	3
3. 狹山藩陣屋跡 99-5 区	6
4. まとめ	26

挿　図　目　次

図 1 狹山藩陣屋跡99-5 区調査区位置図 (S = 1 / 5000)	2
図 2 大阪狭山市周辺の地形と遺跡分布	4
図 3 狹山藩陣屋跡既存調査区位置図 (S = 1 / 5000)	5
図 4 狹山藩陣屋跡99-5 区 (A区) 平断面図 (S = 1 / 80)	7
図 5 狹山藩陣屋跡99-5 区 (B区) 平断面図 (S = 1 / 80)	8
図 6 狹山藩陣屋跡99-5 区 (C区) 平面図 (S = 1 / 80)	10
図 7 狹山藩陣屋跡99-5 区 (D区) 平面図 (S = 1 / 80)	11
図 8 狹山藩陣屋跡99-5 区 (E区) 平面図 (S = 1 / 80)	12
図 9 狹山藩陣屋跡99-5 区 (F区) 平面図 (S = 1 / 80)	13
図10 狹山藩陣屋跡99-5 区 (G区) 平面図 (S = 1 / 100)	15

図11	狹山藩陣屋跡99-5区(H区)平面図(S=1/80).....	16
図12	『狹山藩陣屋跡上屋敷絵図』トレース図.....	17
図13	狹山藩陣屋跡99-5区出土遺物(1).....	21
図14	狹山藩陣屋跡99-5区出土遺物(2).....	22
図15	狹山藩陣屋跡99-5区出土遺物(3).....	23
図16	狹山藩陣屋跡99-5区出土遺物(4).....	24
図17	狹山藩陣屋跡99-5区出土遺物(5).....	25

図版目次

- 図版1 狹山藩陣屋跡99-5区(a. A区全景 b. A区側面の石垣)
- 図版2 狹山藩陣屋跡99-5区(a. A区全景 b. B区第1面全景)
- 図版3 狹山藩陣屋跡99-5区(a. B区第1面遺物出土状況 b. B区第1面土管)
- 図版4 狹山藩陣屋跡99-5区(a. B区第2面全景 b. B区第2面ピット群)
- 図版5 狹山藩陣屋跡99-5区(a. C区第1面全景 b. C区第2面全景)
- 図版6 狹山藩陣屋跡99-5区(a. D区第1面全景 b. D区第1面土管)
- 図版7 狹山藩陣屋跡99-5区(a. E区第2面全景 b. E区第2面ピット群
c. E区第2面ピット群)
- 図版8 狹山藩陣屋跡99-5区(a. F区第1面全景 b. F区第1面ピット群
c. F区第1面土管)
- 図版9 狹山藩陣屋跡99-5区(a. F区第2面全景 b. F区第2面土壤2
c. F区第2面溝4)
- 図版10 狹山藩陣屋跡99-5区(a. G区第2面全景 b. G区第2面北側のピット群)
- 図版11 狹山藩陣屋跡99-5区(a. G区第2面東北部 b. G区第2面南側)
- 図版12 狹山藩陣屋跡99-5区(a. G区第2面埋甕遺構 b. G区第2面土壤1)
- 図版13 狹山藩陣屋跡99-5区(a. H区第1面全景 b. H区第1面石組2)
- 図版14 狹山藩陣屋跡99-5区(a. H区第1面石組2 b. H区第1面埋甕遺構)
- 図版15 狹山藩陣屋跡99-5区(a. H区第2面全景 b. H区第2面土壤2~4)
- 図版16 狹山藩陣屋跡99-5区出土遺物(1)
- 図版17 狹山藩陣屋跡99-5区出土遺物(2)
- 図版18 狹山藩陣屋跡99-5区出土遺物(3)
- 図版19 狹山藩陣屋跡99-5区出土遺物(4)
- 図版20 狹山藩陣屋跡99-5区出土遺物(5)
- 図版21 狹山藩陣屋跡99-5区出土遺物(6)

1. 調査にいたる経過

狹山藩陣屋跡は、狹山池東側の中位段丘面上に立地する近世の城館跡である。豊臣秀吉によって小田原城を落とされた戦国大名の後北条氏が、近世初期にこの地に陣屋を開き、以後明治維新にいたるまで一貫して陣屋が営まれていた。陣屋は御殿が所在する北側の上屋敷と、藩主の別邸や下級藩士の邸宅が並んでいた下屋敷にわかれていた。

明治以後、廃藩置県によって狹山藩陣屋付近の景観は一変し、かつて武家屋敷が立ち並んでいた場所は大半が畠となった。その後の開発によって陣屋周辺はほぼ住宅地となっている。現在では既存宅地の建て替えや、小規模な宅地開発に伴って毎年わずかな面積ではあるが、狹山藩陣屋跡の発掘調査がおこなわれており、その蓄積によって陣屋の構造が少しづつ明らかになりつつある。

今回歩道設置工事が行なわれる府道河内長野美原線は、狹山藩陣屋上屋敷を南北に貫く大手道をほぼ踏襲した道路であり、その歩道設置に伴っては、大手道周辺の邸宅の遺構、遺物の一部に影響が生じることが予想された。そこで大阪狭山市教育委員会では、大阪府教育委員会ならびに工事を施工する大阪府富田林土木事務所と協議をすすめ、平成10年度より大阪狭山市教育委員会が富田林土木事務所から調査を受託する形で、調査を実施することになった。平成10年度の成果については『大阪狭山市文化財報告書17 府道河内長野美原線歩道工事にともなう狹山藩陣屋跡発掘調査概要報告書』すでに概要を報告しているが、かつての道路側溝の一部である石組や多くの遺物が遺棄された土壤などが検出されている。道路工事そのものは数年にわたって実施されるため本年度も昨年度と同様に受託契約を締結し、調査を実施することになった。したがって本報告書は歩道設置工事に伴う第2冊目の報告書ということになる。

発掘調査は、仮歩道の確保や、用地の取得などの関連で小面積に区画して断続的に実施している。大阪狭山市教育委員会ではこの調査のほかにも狹山藩陣屋跡において平成11年（1999年）度にいくつかの発掘調査を実施しているため、本報告書に掲載した調査は狹山藩陣屋跡99-5区ということになる。本報告書では99-5区をさらにA～Hという6つの小調査区にわけて報告しているが、これは必ずしも調査の実施順ではなく、煩雑さをさけるために調査区を北から順に配列した順序である。

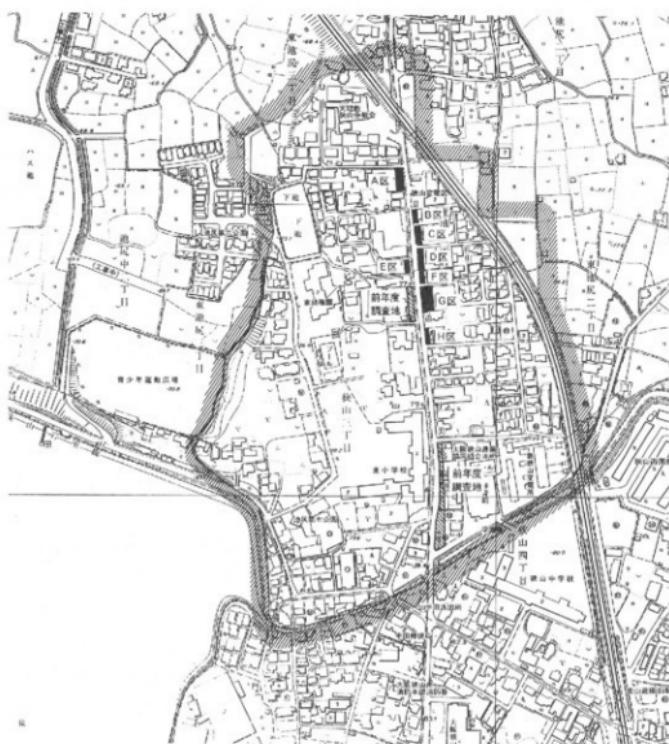


図1 狹山藩陣屋跡99-5区調査区位置図 ($S = 1/5000$)

2. 遺跡周辺の環境

大阪狭山市内の遺跡分布および地形分類は図2のとおりである。大阪狭山市は西側の泉北丘陵と東側の羽曳野丘陵に挟まれた地形で、この両丘陵の間にいく筋かの南北方向の谷筋が走っている。これらの谷筋から旧石器時代・縄文時代の打製石器がいくつか発見されている（上野正和『狹山の考古学研究と私』『さやま誌 大阪狭山市文化財紀要』創刊号 1992）。

弥生時代の遺跡としては、市域南部の高地において、弥生時代後期の集落跡が検出された茱萸本遺跡がわずかに知られるのみである。

古墳時代前期についてもいままだ明らかでないことが多いが、狹山池北方の池尻遺跡において庄内期のものと思われる遺構が確認されており、また狹山神社遺跡でも当該期の遺物が出土しており、沖積面における遺跡の分布が予想される。（『狹山池』埋蔵文化財編 狹山池調査事務所 1998）

古墳時代中期に入ると、泉北丘陵を中心にその造営が展開された陶邑窯跡群が東方へとその領域を拡大した結果、本市域西端にある陶器山丘陵とその北側に広がる高位段丘の斜面に須恵器窯が多く築かれた。古墳時代後期の6世紀中葉から後葉になると、陶邑窯跡群はさらに東方に広がり、本市域中に分布する中位段丘の斜面にも窯を築き須恵器生産を行なうようになった。7世紀代に入ると窯焼き用の薪や斜面が不足したようであり、7世紀初頭に築かれた狹山池の斜面に窯を築いた狹山池1号窯のような例もみられるようになり、その後窯は次第に作られなくなっていく。

狹山池の築造をめぐる諸問題については、長らく議論があったが、狹山池ダム化工事に伴って狹山池調査事務所が実施した発掘調査によって、その年代は7世紀初頭であることが明らかになった。一連の発掘調査によって狹山池内において、中樋遺構、東通り遺構、西通り遺構、木製枠工などさまざまな遺構がつづつに発見され、狹山地域の歴史像は豊かさをますこととなった（『狹山池』埋蔵文化財編 狹山池調査事務所 1998）。

狹山池が築かれた西除川（旧天野川）に沿った大きな谷の東西に広がる中位段丘上には、東野庵寺、池尻城跡、庄司庵遺跡、狹山神社遺跡、狹山藩陣屋跡などの古代、中世、近世の諸遺跡が成立している。池尻城跡では1985年に大規模な発掘調査が行なわれ、南北朝期の城館が検出されている（『池尻城跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 1987）。

狹山藩陣屋跡については1987年以来、大阪府教育委員会や大阪狭山市教育委員会によって継続的に調査が行なわれている。いずれも個人住宅の建築などに伴う小規模な発掘調査ではあるが、段階的に陣屋の構造が明らかになりつつある。

図3はこれまでに狹山藩陣屋跡においておこなわれた調査区の所在を示す図である。もちろん調査は敷地の一部で実施されているだけであるが、それでも上屋敷においては非常に多くの調査が実施してきたことがわかる。

これまでの調査では近世初頭に陣屋が建築されるよりも以前の遺物、遺構はほとんど出土していない。上屋敷についてはほぼ全面にわたって上下2面の遺構面が確認されており、出土遺物からみて、上面は天明2年（1782）の大火以後の遺構面、下層はそれ以前の遺構面と考えら



図2 大阪狭山市周辺の地形と遺跡分布

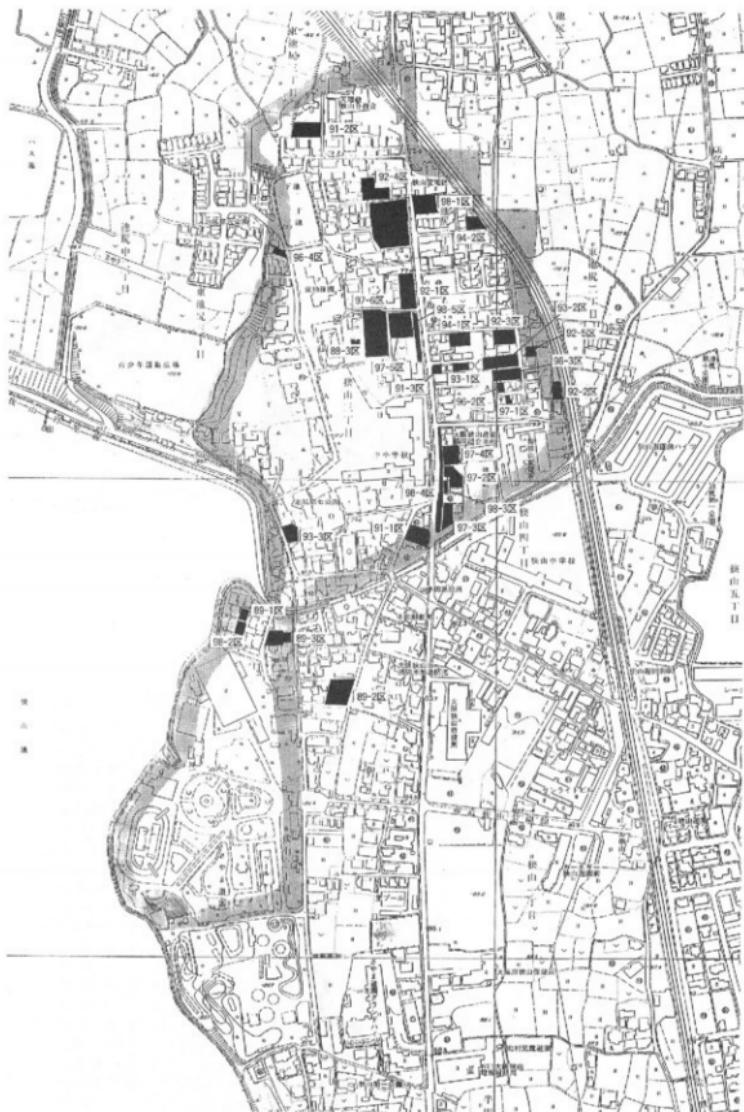


図3 狹山藩陣屋跡既存調査区位置図 (S = 1/5000)

れる。また昨年度実施した98-5区などの成果によると現在の東小学校正門付近に非常に切り立った壁面をもつ堀状の溝が存在したことがわかっている。同様の溝は大手筋の西側でも検出されており、この溝が陣屋の南を画する堀であったと思われる。遺構、遺物はこの溝よりも南においては非常に少ない状況であることもこれを裏付けている。また大手筋の両端には石組の溝が現在も残っている箇所があるが、この溝は上層の時代に設置されており、下層の時期には同様のものはみられない。大手筋のコース、規模が近世の前期と後期で少し異なっていた可能性もある。個々の遺構については非常に多様なものが出土しているが、遺物を多く含むのは屋敷地内の家屋周辺に掘削された土壌を中心である。おそらくは火災などの後でこのような土壌に廃品が遺棄されたものであろう。遺物は日常的な生活用品を中心で、武士独自の生活を示すようなものはそれほど多くない。伊万里など国産のものが中心であるが、まれに外国製のものがみられる。今後も発掘調査を積み重ねていくことによって、陣屋の構造やその内部で営まれていた生活の具体相が明らかになっていくことと思われる。

3. 狹山藩陣屋跡99-5区

① 遺 構

(A区)

本年度調査したうち一番北側の調査区で、長さ17.3m、幅1.8m。狭山藩上屋敷のもっとも北の部分、大手筋にすぐ西接する箇所にあたる。現状地盤から30cmを掘削したところで第1遺構面と思われる面に至ったが、この面においては顕著な遺構を検出することはできなかった。そこでさらに35cmの掘削を実施したところ第2遺構面を検出した。遺構は調査区内での長さ720cm、同じく幅105cmの土壌と、その周辺のピットが検出された。土壌は調査区内において深さが最大65cmで、多くの陶磁器類、瓦などが出土している。ピット群は調査区内において観察するかぎり配列状況は明確ではなく、これらの遺構の意味するところは不明というしかない。土壌は廃棄用に掘削されたものであろう。

この調査区は明治初期に作成され近世後期の陣屋内の状況を伝える『狭山藩陣屋上屋敷図』によると、狭山藩の上級の家臣であった船越氏の邸宅のすぐ東側の部分にあたるが、今年度の他の調査区とはことなり道路の側溝などの遺構が検出されていないため、邸宅内である可能性が高い。

(B区)

大手筋に東接する調査区で、長さ14.0m、幅2.4mについて発掘調査を行なった。現状地盤を15cm掘削したところで第1遺構面を検出した。調査区の西端には長さ14.0m以上、幅40cm以上の溝1が検出されており、そのうち長さ9.2mについては石組が残存していた。この石組は大手筋の東側の側溝の東側側面と屋敷地の境界を兼ねたものであり、付近には現在でも同種の石組が数箇所で残っている。現存する石組を観察すると高さは溝の底から約60cmで、この場所ま

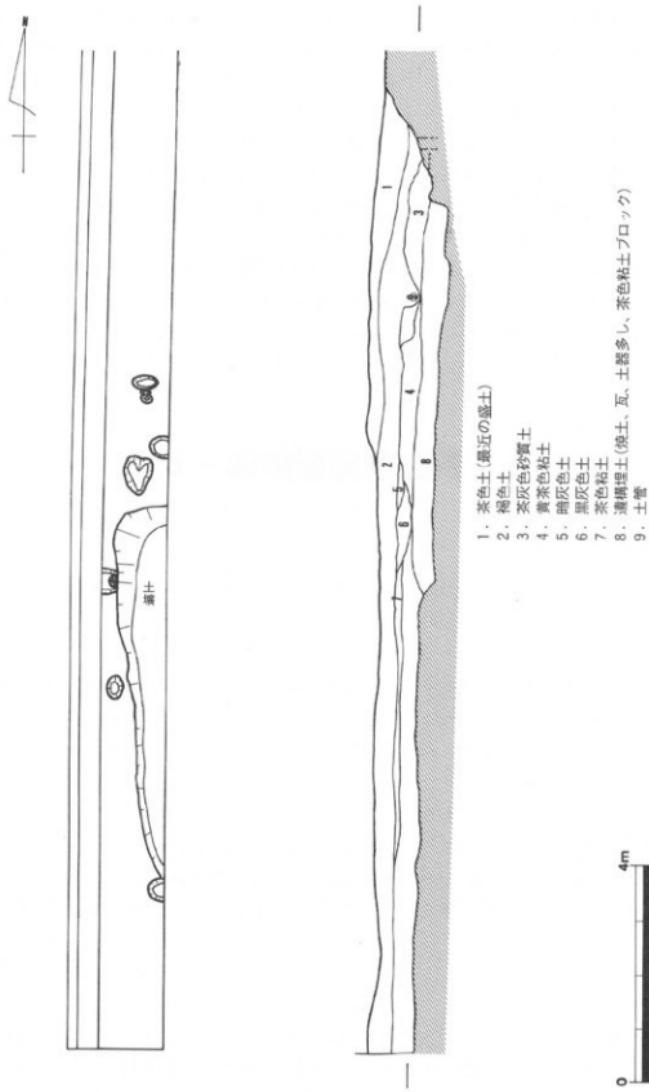


図4 狹山藩陣屋跡99-5区（A区）平断面図 ($S = 1/80$)

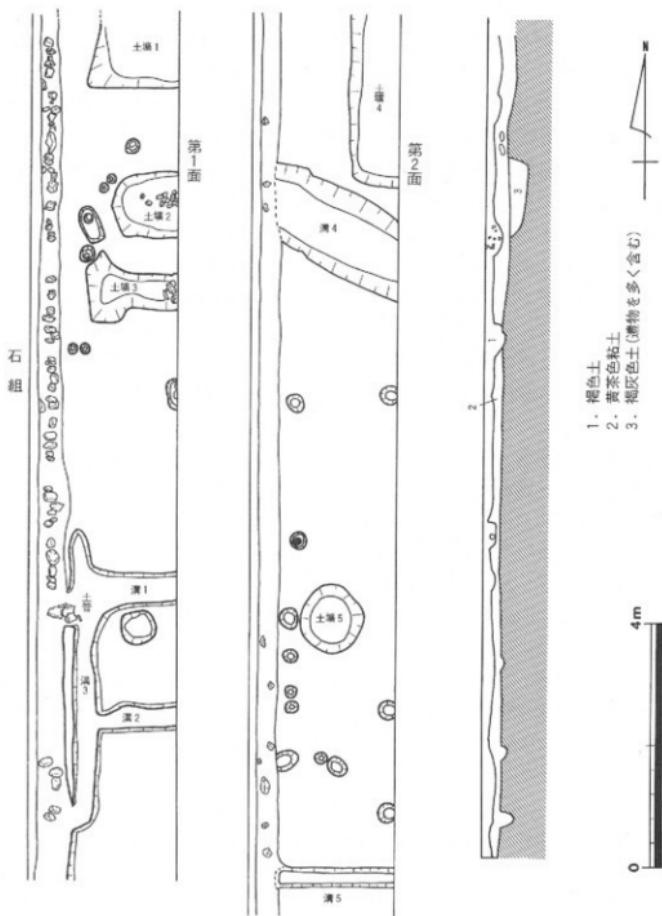


図5 狹山藩陣屋跡99-5区（B区）平断面図 ($S = 1/80$)

で盛土をして内部に屋敷を構築している。今回検出された石組は高さ平均25cmで石は2段程度しか残っておらず、上部については撤去されたものと思われる。また溝1のうち石組がみられない部分についてもかつては石組が布設されていたものと思われる。石組よりも東側には土壙、溝、ピットなどの遺構がみられた。土壙1は調査区内において南北128cm、東西122cm、最大の深さ18cmであり、内部から瓦片が出土している。土壙2は調査区内において南北105cm、東西104cmでさらに東側にのびる。最大の深さは15cmである。底部に直径5~7cmの礫が固まった状態で検出されている。また埋土中より瓦片が出土している。土壙3は調査区内において東西152cm、南北58cmの溝状の土壙であるが、西側の先端部において幅が112cmと広がり全体がT字型となっている。土壙2同様礫の集中が見られる。また土壙2、3を取り囲むようにピットがみられるが、規則的な配置をしめさずその性格は明らかではない。調査区の南部においては東西方向の溝1、2とそれに直行する南北方向の溝3がみられた。溝1は幅48cm、2は40cmとともに屋敷地の方向（東）から道路側に流れている。2本の溝は直接側溝には流れ落ちず、いったん溝3に合流している。溝3は幅43cm、長さ482cmで北側は溝1との合流点の少し北側でおわっているが、南端において側溝に流れこんでいる。また溝1との合流点の箇所では土管を2個連続した暗渠によって側溝にも水を落としている。これらの溝は屋敷地からの排水を目的にしたものと考えられる。溝の併行した状況からこの部分が屋敷地の出入口であった可能性もある。

第2面においては土壙、溝、ピット群などがみられた。土壙4は調査区内において南北280cm、東西20cmで深さは15cmの浅い土壙である。溝4は南西から東北方向に流れる溝で幅140cm、深さは70cm。ほぼ垂直に掘削された明瞭な溝である。土壙5は直径104cmの正円形の土壙で、深さは8cm。この土壙の周辺にはピット群がみられる。いずれも基礎石を撤去したあと不明瞭な土壙であるが、ピットはほぼ南北東西に並んでおり、南北方向に棟をもつ建物が復元可能である。大手道に接した建物の配置から門長屋のような建物を想定するのが妥当だろう。また溝5は東西方向の溝で幅35cm、深さ20cm。ほぼ垂直に掘削された溝であり、屋敷地内から側溝に向けての排水を目的とした溝と思われる。この遺構面の遺構からは顕著な遺物は検出されていないので、それぞれの遺構の時期は不明であるが、溝4は大手道の方向やピット群などとは異なる方向をもち、掘削された時期にも他と差があることが予想される。

(C区)

大手筋に東接する調査区で長さ12.8m、幅2.0mについて発掘調査を行なった。現状地盤より15cm掘削したところで第1面を検出した。この面では調査区の西半分および南端が搅乱されており全体の様相は明確ではないが、残された範囲で溝およびピット群を検出した。溝は調査区の北端で検出され、その方向はほぼ東西方向を示している。幅14cm、深さ15cmの小規模な溝である。この溝よりさらに北側に、密着しながらも東西に並ぶピット群、また溝の南にも南北約8mにわたって分布するピット群があるが、調査区の東壁に遮られて全体の様相は不明である。

次にさらに30cmの掘削を行い第2面の調査を行なった。この遺構面においては南端で土壙、西端でピット列を検出した。土壙はほぼ正円形で、直径は84cm、深さは30cmであった。ピット

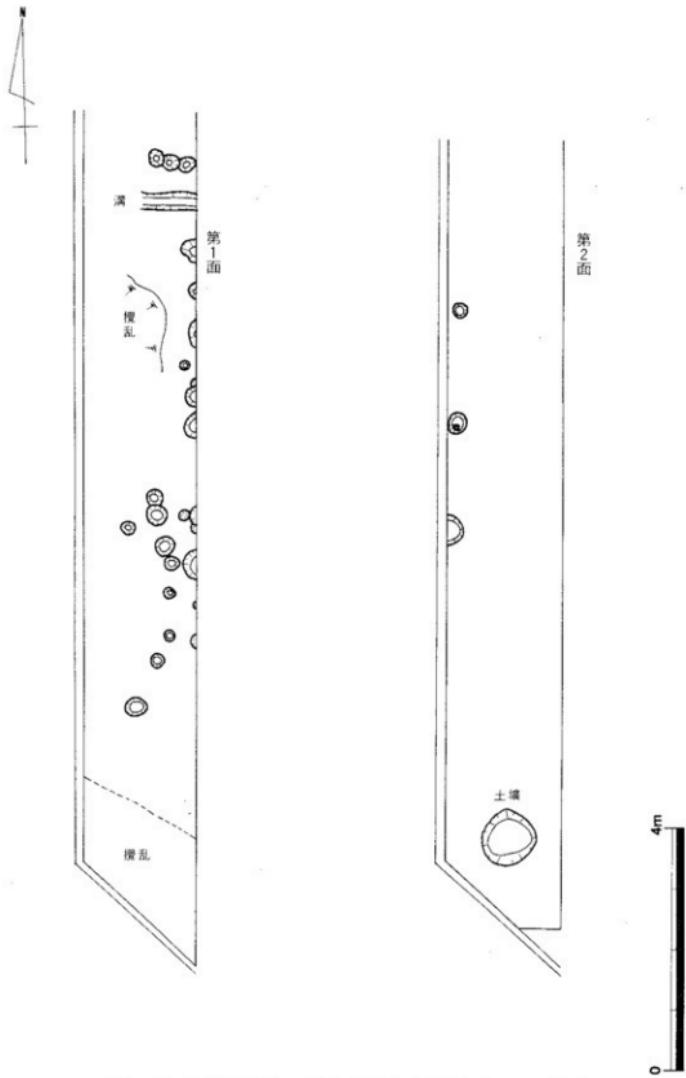
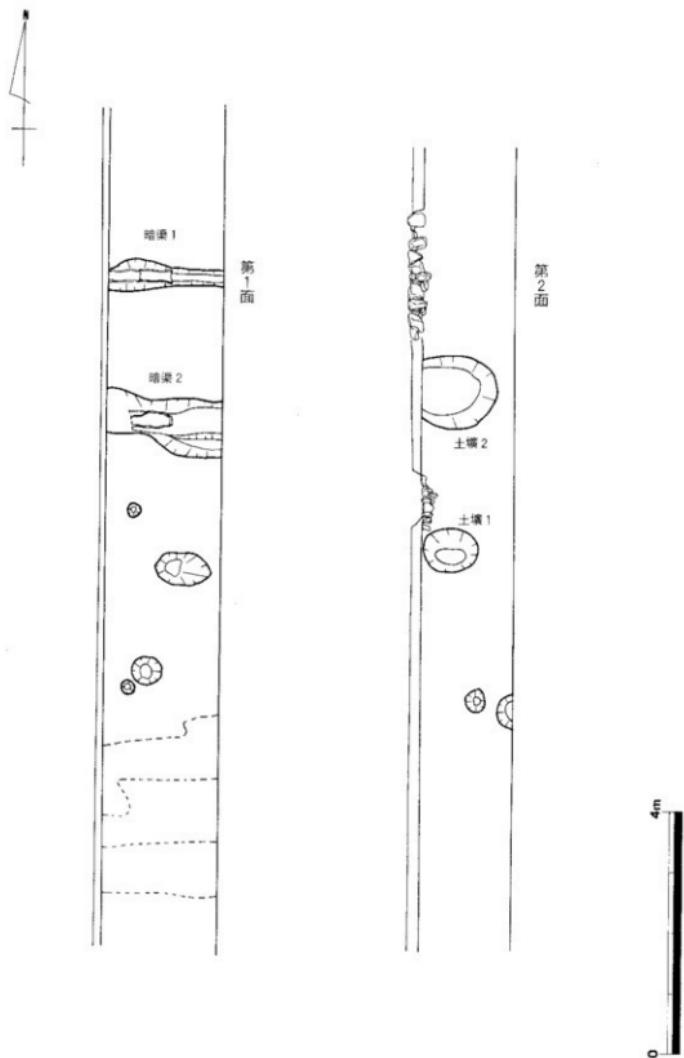


図6 狹山藩陣屋跡99-5区（C区）平面図 ($S = 1/80$)



は全部で三つではほぼ南北にならぶ。互いの距離は180cmで、ほぼ1間であり、これよりも東側で同様のピットが検出されていないので建物の存在は想定しがたい。おそらくは樹列、あるいは堀が存在していたものと思われる。ただこのピット列の方向は現在の大手筋の方向よりも若干東側に振っている。

(D区)

この調査区はC区とは道1本を隔てて南接する場所にあり、やはり大手道に東接する調査区である。現状地盤を20cm掘削した箇所で第1面を検出した。この遺構面では暗渠をもつ溝と若干のピットを検出した。北側の暗渠1は東西方向で瓦製の土管2本を連結していた。溝の幅は40cm、土管の幅は28cmであった。土管の上部は破損されていたが、ソケット式に他と連結される形式のものでそのため片方の端部がやや太くなっている。土管の東側にも溝は連続するがおそらくこの部分には当初から土管は布設されていなかったよう、土管を伏せた部分だけ少し溝を深く掘ってあった。暗渠2は暗渠1の南側220cmのところに布設されていて、溝の幅は50cm、やはり2本の土管を連続してあった。こちらも当初から2本の土管を伏せた暗渠であったと思われる。溝はさらに東側にのびることから屋敷内の排水のために布設された暗渠であることは確実であるが、その側溝の石組の部分のみ暗渠を利用しその他の部分では素掘りの溝としている。

第2面は第1面からさらに25cm掘削した箇所に存在した。この面においては土壌とピットを検出している。土壌1は楕円形で長径98cm、短径72cm、深さ35cm。土壌2は西端がコンクリートの擁壁にかかるがやはり楕円形で長径は122cm以上、短径は115cm、深さは42cmであった。ともに敷地の西端に接しているがその性格は不明である。

(E区)

本調査区は大手筋にすぐ西接する場所に所在する。現状の地表面は土であったが、15cm程度掘削したところコンクリートを床打ちしてあり、この工事によって他の調査区でいう第1面の遺構面がすでに削平されていることを確認し

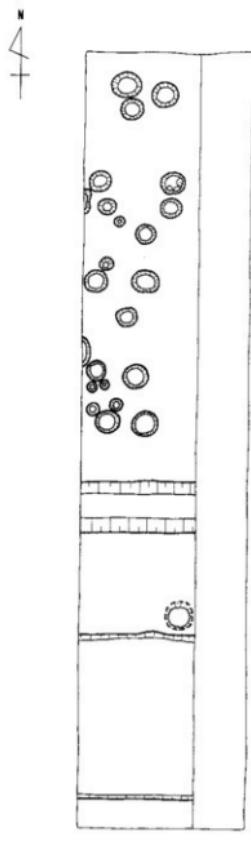


図8
狭山藩陣屋跡99-5区(E区)
平面図(S=1/80)

た。そこで調査を第2面の検出にしまってさらに掘削したところ現状地盤から60cm下がったところで第2遺構面を検出した。北側にはピット群がみられたが、いずれも浅く、また明確な並びも確認できなかった。このピット群の南側には幅80cmの東西方向の溝を検出している。長さは両端が調査区の外に続くために確認できないが、深さは25cmで比較的明瞭な肩を持っている。そのさらに南側には幅260cmの東西方向の溝が存在するが、こちらは深さ10cmの非常に浅い落ち込み的な溝である。本調査区では大手筋の東側の調査区とは異なり、大手筋の測溝と思われる石組溝は見られなかった。昨年、E区より30mほど南側で同様の調査を行い、この時には石組溝を検出しているので、この地点においては溝はさらに東側に所在したものと考えられる。E区で検出された東西方向の溝は屋敷地から測溝に向けて排水用の溝と考えられる。またピット群の性格は不明であるが、おそらくは大手筋に沿って建てられた堀などの遺構と思われる。

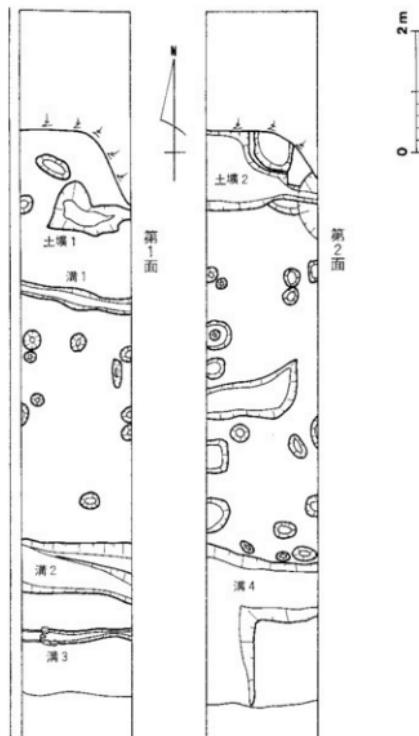


図9 狹山藩陣屋跡99-5区(F区)平面図
(S=1/80)

(F区)

大手筋に東接する調査区で東西1.8m、南北12mについて調査を実施した。調査区の北側約2mについては電柱の設置などに伴い搅乱されていたが、それ以外の場所においては上下2枚の遺構を検出した。第1面は現状地盤から40cm下がった位置に存在していた。土壌1は東西128cm、南北80cmの不整形の形態で深さは最大で42cmであった。調査区の東外側から溝が続きラッパ状に広がったような形状である。また溝1は最大幅35cm、深さ8cmの非常に浅い溝で東西方向よりもやや北側にもかって流れている。溝2は幅1m、深さ40cmの東西方向の溝、溝3は幅30cm、深さ15cmの東西方向の溝である。溝3の西側底部では瓦製の土管が検出されており、大手筋の測溝に向けての排水用の溝と思われる。また溝1と溝2の間にはピット群がみられたが、明確な配列は見いだせない。

第1面からさらに20cm掘削したところで第2遺構面を検出した。調査区の一番北側に存在した土壌2は上層の同じ場所にあたる土壌1と同じく調査区東外側から続く溝の水を受ける構造で、南北方向の細長い溝と切りあつていて。また調査区の南端にはL字型の溝がある。溝の東西部分は最大幅100cm、深さ35cm。非常に明瞭な肩を持った溝である。また土壌1と溝4の間には多くのピットがみられ、特に調査区の西端のピットは南北方向に配列している。屋敷地の西側を画する塀や壁などの境界施設の遺構と考えられよう。

(G区)

G区は大手筋をD区よりもさらに南下した場所に所在し、南北の長さ22.0m、東西の長さ5.5mについて調査を実施した。現地はもともと駐車場であり、コンクリート舗装がなされていたため、その工事の際に相当な削平が行われており、他の調査区では現状地盤から15cm~20cm程度下がったところにある第1遺構面はほぼ完全に削平されたものと考えられた。したがって発掘調査は現状地盤を70cm掘削した箇所で検出された第2遺構面にしほって実施した。この調査区では土壌や溝、ピット群などが検出されている。土壌1は調査区の東壁にかかるため全体の規模は不明であるが、調査区内において南北195cm、東西70cm。ほぼ垂直に掘削され深さは120cmであった。内部からは大量の瓦、磁器片などが出土しており、投棄用に掘削された土壌であると考えられる。土壌2は北側が後世の搅乱によって削られているが、残存する南北長290cm、幅152cmの細長い土壌である。深さは35cmである。土壌3は南北95cm、東西165cmの不整形の土壌で深さは20cm。また土壌2のすぐ東側には埋甕遺構がみられた。甕は漆焼で底部のみが残存するが、上部は破損していた。調査区の南端では溝1を検出している、溝の方向は西北~南東で、大手筋などとは直交しない。溝1は深さ20cmであるが、一部が深く掘削されておりその部分の深さは90cmに及ぶ。またE調査区においては多くのピットがみられた。ピット群は大きく三ヶ所にわけられる。調査区の北端、土壌2のさらに北側でみられたピット群はほぼ東西方向に並ぶが、その間隔や配列は必ずしも明確なものではない。また土壌2の西側には南北方向に並ぶピット群がみられる。ともに樹列や塀のような遺構であると推定できるが、数度の建て替えが行なわれた可能性が強い。また調査区の中央から南に広がるピット群は、北側のピット群よりも互いの間隔が広く建物の遺構である可能性が強い。しかしながら直線に並ぶものは少なく建物の復元は困難である。

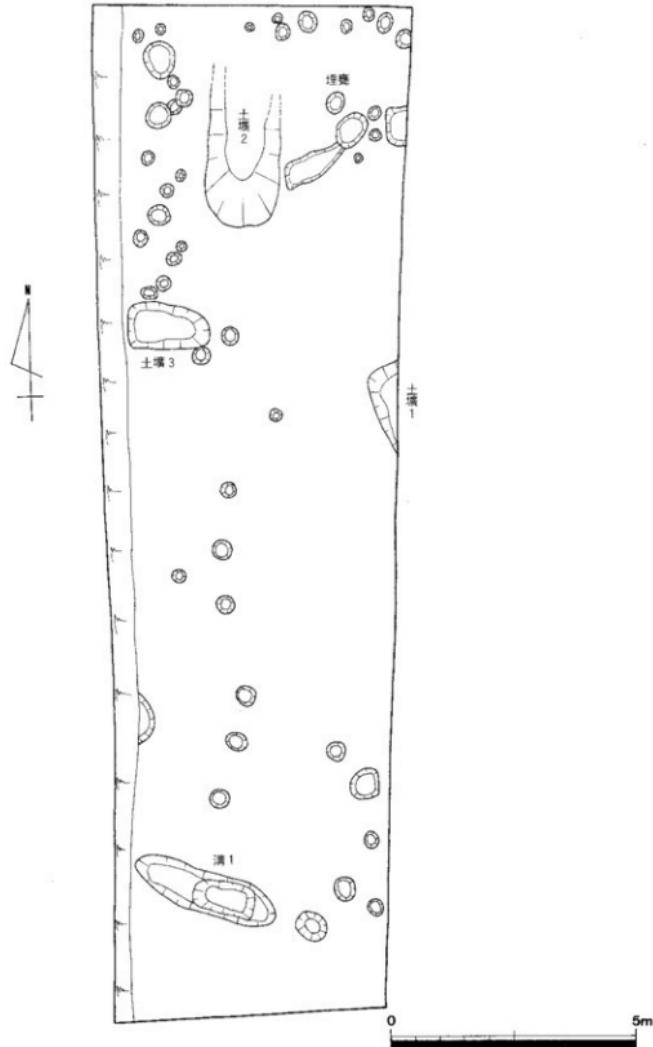


図10 狹山藩陣屋跡99-5区（G区）平面図 ($S = 1/100$)

(H区)

H区は今年度調査を実施したなかでもっとも南側に所在する調査区である。南北15.2m、東西2.1mの範囲で発掘調査を実施した。現状地盤から20cm掘削したところで第1面を検出した。精査したところ溝、土壤、石組などを検出した。溝1は幅120cm、深さ35cmで底面は東から西に傾斜している。西側の底部にはこぶし大の礫が集中する箇所がみられた。この溝と切りあう形で土壤1が存在する。調査区の東壁で連れ全体の規模はわからないが、調査区内において南北170cm、東西58cm、深さは42cmで内部からは多くの瓦片や磁器、硯などが出土しており明らかに投棄用に掘削された土壤である。溝1との切り合い関係からまず溝1が掘削され、それが埋められない状態で土壤1が掘削されたものと考えられる。土壤1のすぐ南には埋甕遺構がみられた。E区のものと同様に埋められていたのは漆焼の甕で、やはり上部は破損され底部のみが残存していた。また調査区の東端には石組が2本みられた。430cmにわたって残存していた南北方向の石組1は他の調査区でもみられたように大手筋の側溝の東壁を構成するものと考えられるが、その南側の石組2は石組1よりも小さなこぶし大の石をならべたもので1段のみの石組である。幅65cm、深さ10cmの浅い溝の中に石を並べている。石組1を平行移動すると石組2はそれよりも60cmほど東側に下がった場所に並べられている。石組2は調査区の南にさらにのびるが、調査区内において長さ525cm、石組2を含み溝の長さは365cmである。この石組2を含む溝に直交するのが溝2である。幅75cm、深さ40cmの比較的大きな溝である。屋敷からの排水を目的にした

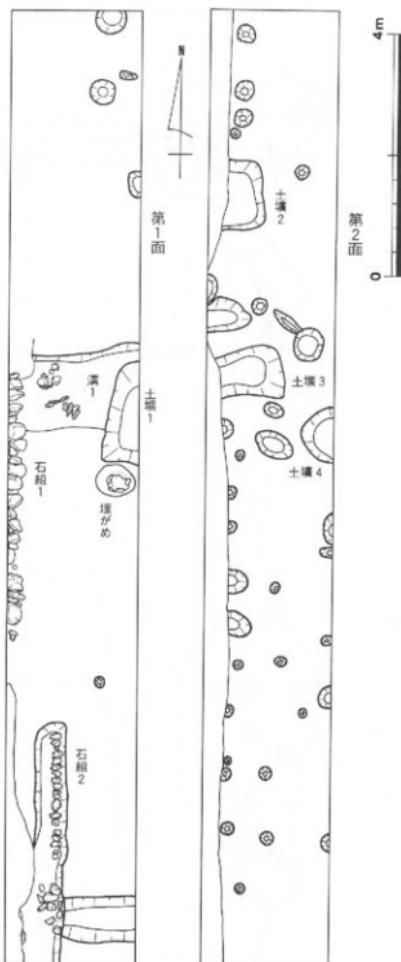


図11 狹山藩陣屋跡99-5区(H区)平面図
(S=1/80)

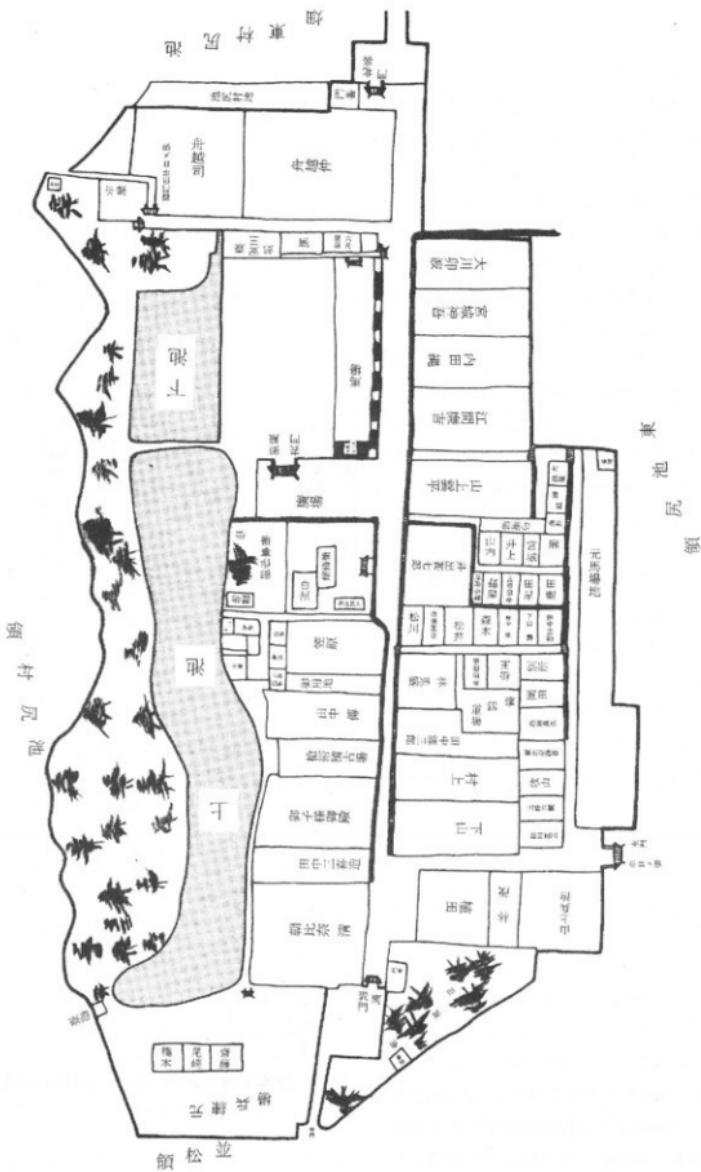


図12 「狭山藩陣屋上屋敷」トレース図

溝と思われる。

第1面の調査を完了して、再び掘削を開始したところそれより25cm下において第2遺構面を検出した。この遺構面においては多くのピットと土壙を検出した。土壙2は調査区内において東西75cm、南北118cm、深さ20cmの方形の土壙である。また土壙3は調査区内において東西102cm、南北80cmの長方形の土壙。深さは40cm。土壙4も調査区外にのびるが正円形と思われる土壙で直径85cm、深さ20cmである。ピットは土壙3よりも南側で非常に多くみられる。ある程度南北東西に並んでいるが直線的な配列はもたない。建物の遺構である可能性が強いだろう。

② 遺 物

遺物については、今回調査した範囲については全体的に遺構面が第1面と第2面に明瞭にわかっているため、調査区をまとめ、面ごとに図面を掲載している。(図13~17参照) 1から52までが第1面の遺物であり、53以降が第2面の遺物である。巻末の図版の番号も図面の番号と同じものと付しているので参照していただきたい。

全体的には圧倒的に肥前系の磁器が多く、まれに京都や瀬戸美濃の陶器が交じる。また甕や指鉢は距離的に近い堺の製品が多い。少し変わったものとしては32の土人形、33の小型の覗、41の瓦製の牛足などがある。

番号	調査区	遺構面	遺 構	遺 物	口径	器高
1	D区	第1面	第1面掘削中	肥前系磁器小杯	5.4	1.7
2	C区	第1面	上層掘削中	肥前系磁器小碗		2.4
3	H区	第1面	土坑1中	京焼陶器小杯	4.6	2.2
4	B区	第1面	機械掘削中	肥前系磁器中碗	10.0	4.4
5	B区	第1面	機械掘削中	肥前系磁器中碗		3.2
6	B区	第1面	機械掘削中	肥前系磁器中碗	8.4	2.3
7	B区	第1面	機械掘削中	肥前系磁器中碗	9.2	3.7
8	B区	第1面	機械掘削中	瀬戸美濃系陶器中碗	9.2	5.5
9	B区	第1面	機械掘削中	肥前系磁器中碗		2.2
10	B区	第1面	機械掘削中	肥前系磁器中碗	10.4	5.2
11	B区	第1面	機械掘削中	肥前系磁器中碗		2.6
12	B区	第1面	機械掘削中	肥前系磁器中碗		2.0
13	B区	第1面	機械掘削中	肥前系磁器中碗	12.5	3.8
14	B区	第1面	側溝中	肥前系磁器中碗	8.4	4.5
15	B区	第1面	機械掘削中	肥前系磁器中碗		2.2
16	H区	第1面	埋甕中	肥前系磁器中碗	8.0	4.6
17	B区	第1面	側溝中	丹波焼陶器小碗		3.3
18	B区	第1面	機械掘削中	肥前系磁器中碗	6.4	4.2
19	B区	第1面	側溝中	肥前系磁器皿		3.4
20	B区	第1面	機械掘削中	肥前系磁器碗	10.0	2.3
21	B区	第1面	機械掘削中	瀬戸美濃系陶器碗	12.4	5.7
22	D区	第1面	暗渠2	產地不明陶器鉢		8.0
23	F区	第1面	埋甕周辺	肥前系磁器碗		5.0
24	B区	第1面	機械掘削中	肥前系磁器中碗	9.6	6.0
25	B区	第1面	機械掘削中	肥前系磁器小皿		1.6
26	D区	第1面	暗渠2	肥前系磁器皿		2.25
27	B区	第1面	機械掘削中	肥前系磁器皿	11.8	1.6

28	B区	第1面	機械掘削中	肥前系磁器皿	12.4	2.1
29	B区	第1面	機械掘削中	肥前系磁器皿		2.3
30	B区	第1面	機械掘削中	丹波焼陶器壺		11.4
31	B区	第1面	機械掘削中	瀬戸美濃系陶器鉢		7.4
32	B区	第1面	機械掘削中	產地不明土人形(女官)	幅6.0	6.9
33	H区	第1面	土坑1中	小型甌	幅4.9	長#9.6
34	C区	第1面	第1面掘削中	產地不明陶器仏花瓶	7.0	11.8
35	D区	第1面	第1面掘削中	ミニチュアかまと	幅4.8	3.8
36	B区	第1面	機械掘削中	土師皿	6.4	1.5
37	B区	第1面	機械掘削中	土師皿	8.6	1.0
38	B区	第1面	機械掘削中	土師皿	10.0	1.4
39	B区	第1面	機械掘削中	土師皿	10.4	1.6
40	D区	第1面	暗渠2	瓦質土管	33.0	56.0
41	D区	第1面	暗渠2	瓦質牛足	幅10.2	11.6
42	B区	第1面	機械掘削中	產地不明火入れ	10.4	6.5
43	D区	第1面	第1面掘削中	產地不明植木鉢		5.0
44	B区	第1面	機械掘削中	產地不明陶器茶釜	9.4	11.2
45	B区	第1面	機械掘削中	堺湊焼摺鉢		4.6
46	D区	第1面	第1面掘削中	堺湊焼摺鉢	33.0	8.5
47	B区	第1面	機械掘削中	堺湊焼摺鉢	42.2	17.5
48	H区	第1面	埋甕	堺湊焼甕		14.0
49	B区	第1面	機械掘削中	焙烙	30.0	3.1
50	B区	第1面	機械掘削中	堺湊焼甕	32.0	10.5
51	B区	第1面	機械掘削中	焜炉	24.4	20.9
52	F区	第1面	埋甕周辺	產地不明陶器甕	25.2	19.3
53	E区	第2面	溝1	肥前系磁器小碗	6.3	4.35
54	G区	第2面	溝1内	肥前系磁器中碗	8.6	3.3
55	G区	第2面	溝1内	肥前系磁器中碗	9.2	4.75
56	G区	第2面	包含層中	肥前系磁器中碗	11.2	4.4
57	G区	第2面	溝1内	肥前系磁器中皿		13.6
58	E区	第2面	溝1	土めんこ	幅3.8	1.1
59	G区	第2面	包含層中	焙烙	30.4	3.1
60	G区	第2面	溝1	植木鉢	28.0	10.0
61	G区	第2面	包含層中	產地不明焜炉	9.6	7.0
62	G区	第2面	溝1	堺湊焼摺鉢		4.4
63	G区	第2面	包含層中	堺湊焼甕		7.5
64	G区	第2面	埋甕	堺湊焼甕		10.4

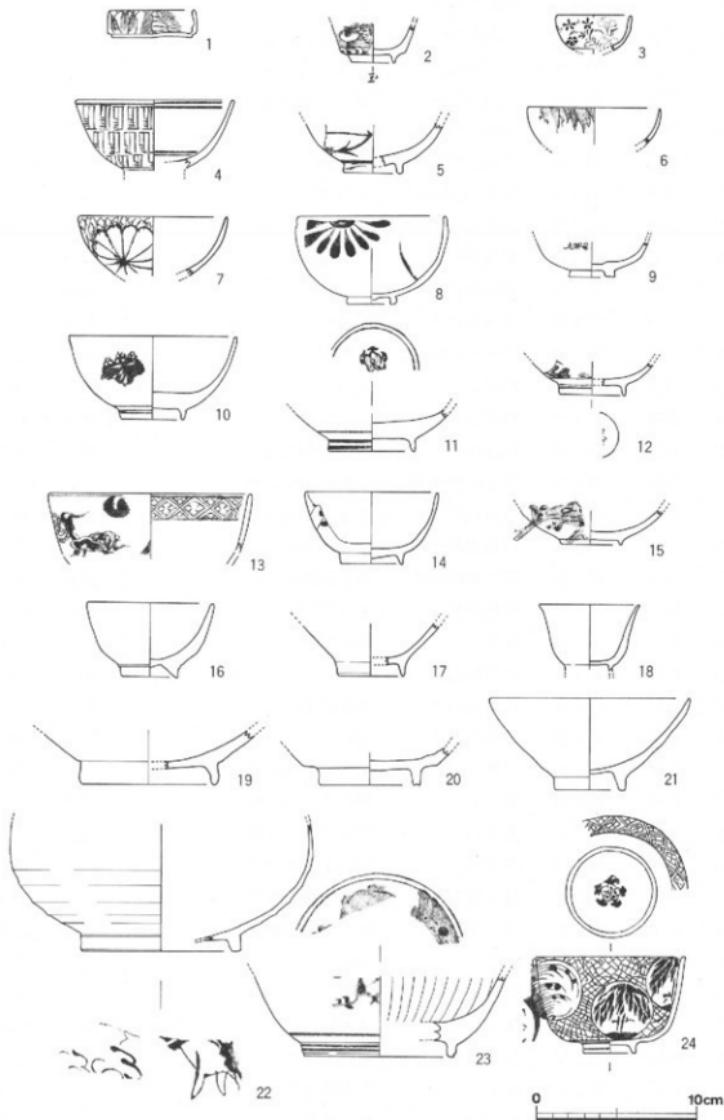


図13 狹山藩陣屋跡99-5区 出土遺物（1）

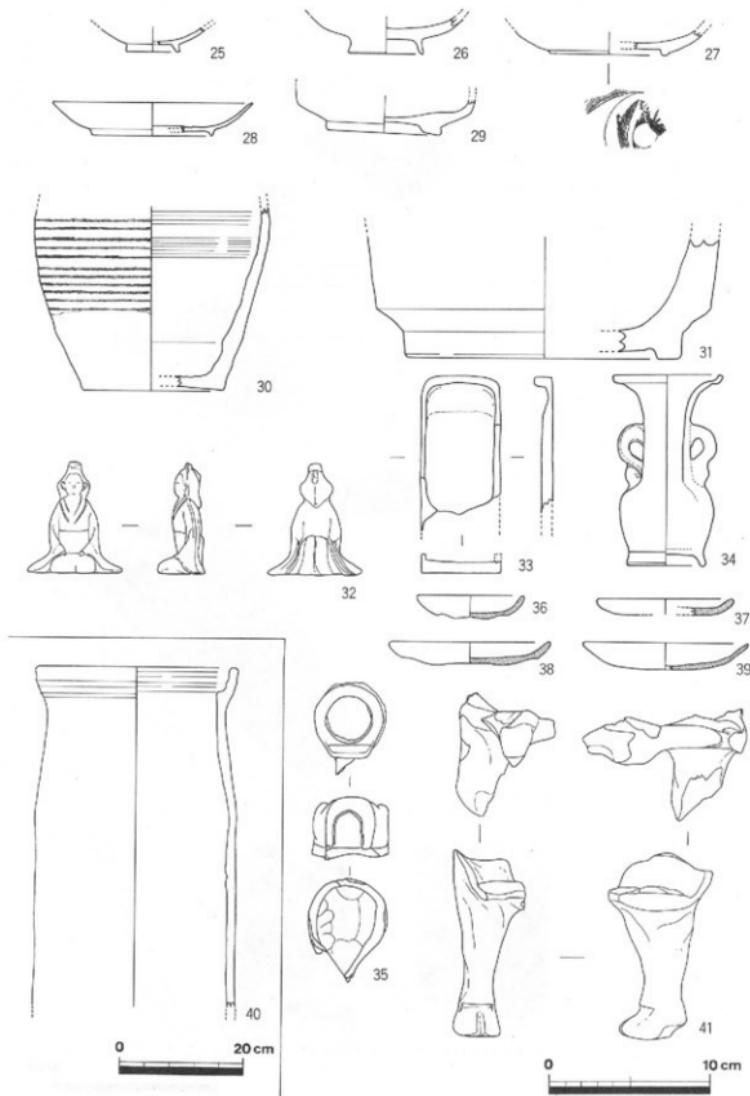


図14 狹山藩陣屋跡99—5区 出土遺物（2）

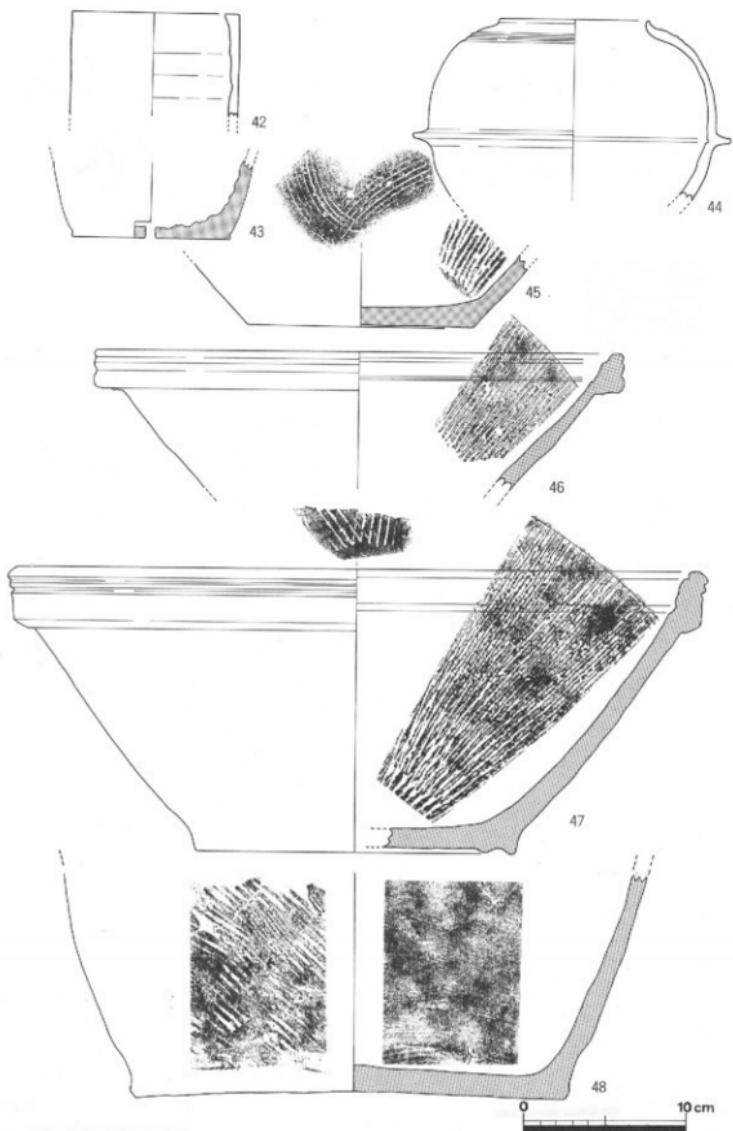


図15 狹山藩陣屋跡99-5区 出土遺物（3）

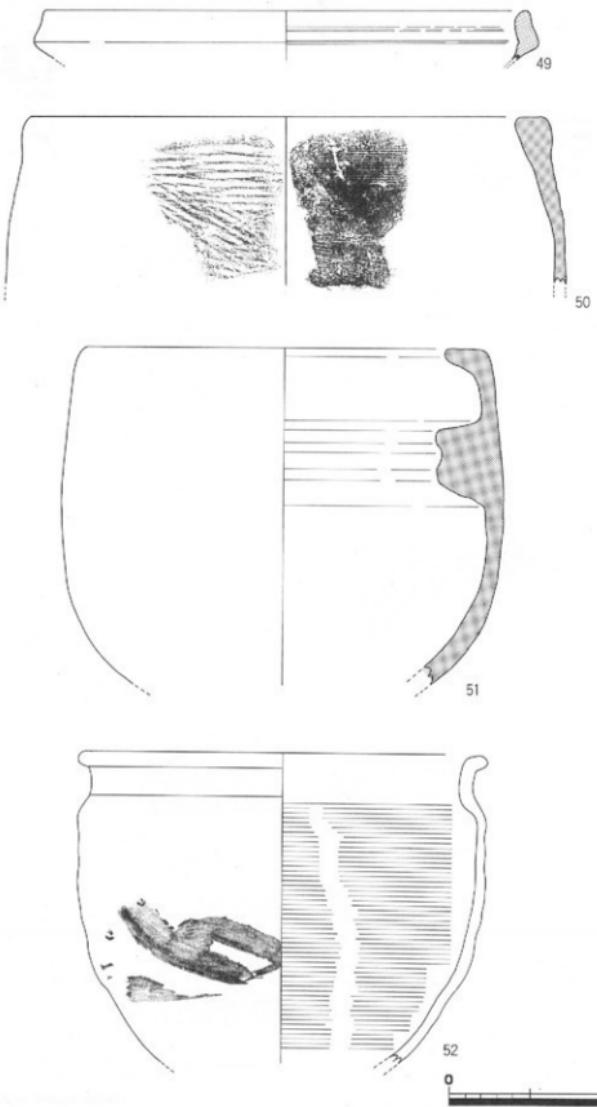


図16 狹山藩陣屋跡99—5区 出土遺物 (4)

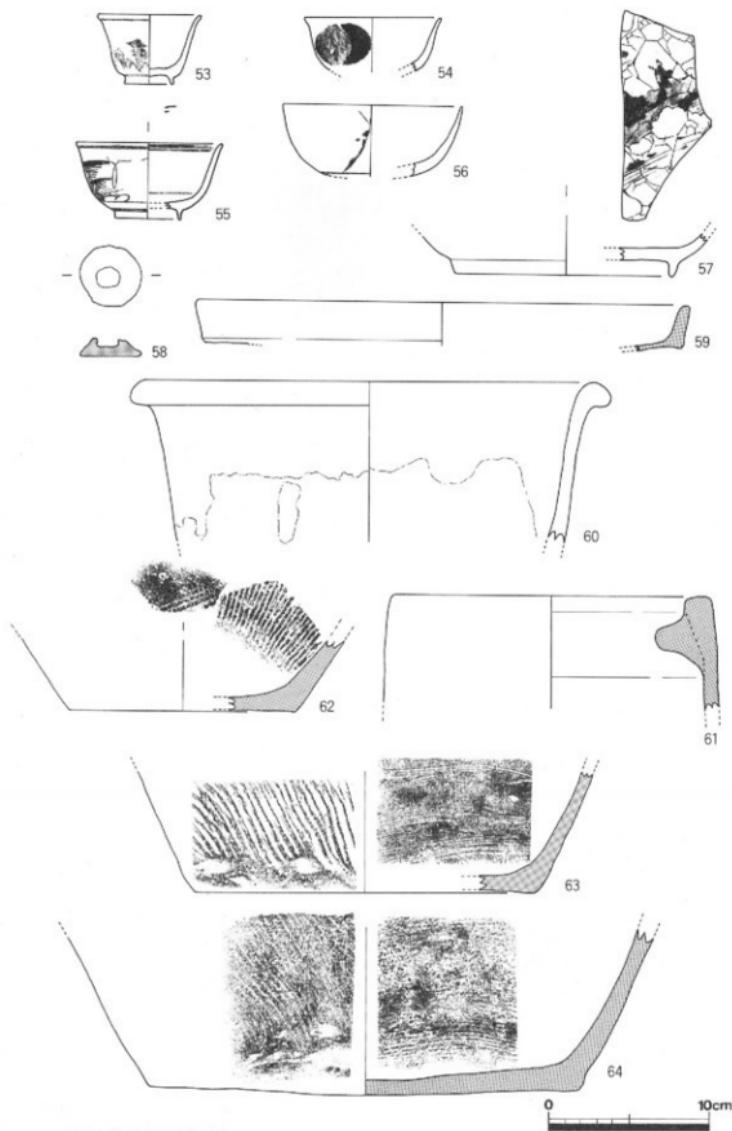


図17 狹山藩陣屋跡99-5区 出土遺物(5)

4. まとめ

今年度の調査も歩道の工事に伴うものであったため大半は2m程度の幅の調査区を設定して発掘調査を実施することとなった。個々の調査区における成果はそれほど大きなものではないが、それらを総合するといくつか狭山藩陣屋について新たな知見をえることができた。調査地は大手筋に隣接した部分であるが、全体について上下2面の遺構面が検出できた。第1面においては石組の側溝が存在するが、これは第1面の時代に設置されたもののように第2面ではそれが観察できない。また第1面ではこの側溝に流れこむ暗渠がいくつか存在したが、これも第1面独自のもので第2面にはみられなかった。あるいは第2面の時期には大手筋の幅が第1面の時期よりも小さかった可能性もあるだろう。また第2面においてはB区、E区、F区のように明らかに建物と思われる遺構を検出することができた。これらは大手筋に接していることから門長屋的なものと思われる。第1面、第2面の時期は、第2面における遺物の出土が少なく明確ではないが、第1面については近世後期の遺物が多く、これまでいわれてきたように第2面は天明2年の大火の後、盛り土された面であると思われる。

報告書抄録

ふりがな 所収遺跡	ふどうかわちながのみはらせんはどうこうじにともなう さやまはんじんやあとはっくつちょうさがいようほうこくしょⅡ							
書名	府道河内長野美原線歩道工事にともなう狭山藩陣屋跡発掘調査概要報告書Ⅱ							
著者名								
シリーズ名	大阪狭山市文化財報告書							
シリーズ番号	19							
編著者名	市川秀之							
編集機関	大阪狭山市教育委員会							
所在地	〒589-0005 大阪府大阪狭山市狭山1丁目2384-1							
発行年月日	西暦 2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北 檿	東 檻	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
市町村	遺跡番号							
さやまはん 狭山藩 じやくさん 陣屋跡	おおさか ふ おおさか 大阪府大阪 さやま し さやま 狭山市狭山	27231		34度 30分 15秒	135度 33分 30秒	19991001～ 20000331	279	歩道設置工事 に先立つ調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
狭山藩 陣屋跡	城館跡	江戸時代	廃棄物の土壌、石列、 土管暗渠、建物跡、溝、 埋甕遺構		小杯、碗、皿、土人形、 小型硯、ミニチュアかまと、 土管、瓦質牛足、火入、 植木鉢、茶釜、摺鉢、 壺土めんこ、ほうらく			

図版



a. A区全景



b. A区側面の石垣



a. A区 全景



b. B区第1面 全景



a. B 区第 1 面 遗物出土状况



b. B 区第 1 面 土管



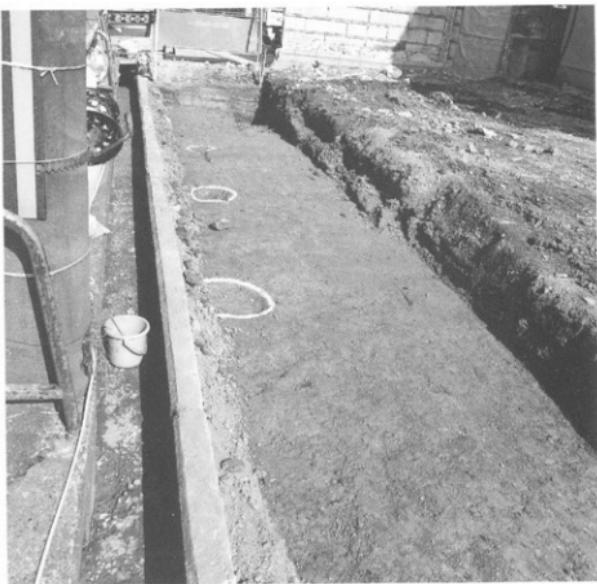
a. B区第2面 全景



b. B区第2面 ピット群



a. C区第1面 全景



b. C区第2面 全景



a. D区第1面 全景



b. D区第1面 土管

a. E 区第 1 面
全景



b. E 区第 2 面
ピット群



c. E 区第 2 面
ピット群



a. F区第1面
全景



b. F区第1面
ピット群



c. F区第1面
土管



a. F 区第 2 面
全景



b. F 区第 2 面
土壤 2

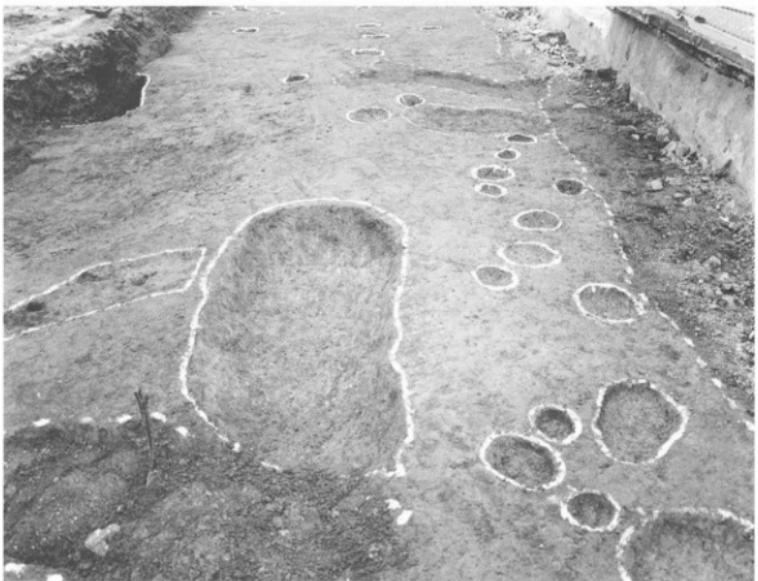


c. F 区第 2 面
溝 4





a. G区第2面 全景



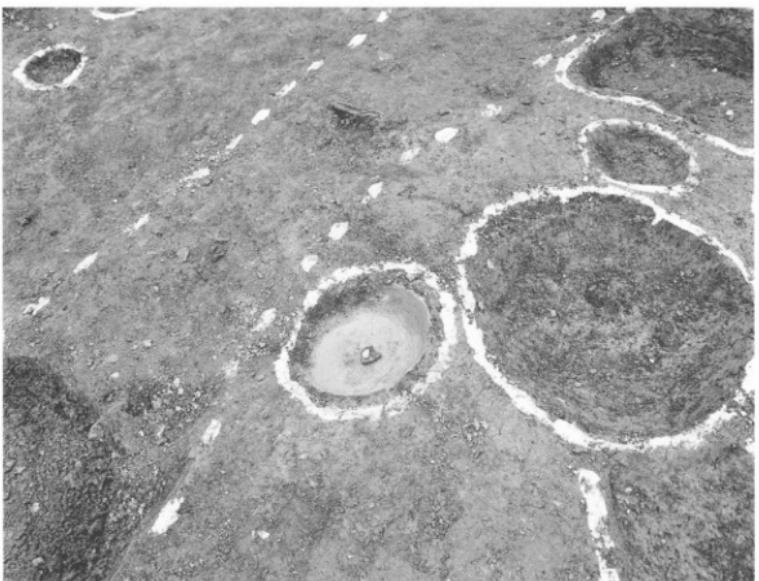
b. G区第2面 北側のピット群



a. G 区第 2 面 北東部



b. G 区第 2 面 南側



a. G 区第 2 面 埋甕遺構



b. G 区第 2 面 土壙 1



a. H区第1面 全景



b. H区第1面 石組 2



a. H区第1面 石組 2



b. H区第1面 埋甕遺構



a. H区第2面 全景



b. H区第2面 土壌 2~4



3



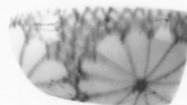
13



1



4



7



24



10



8



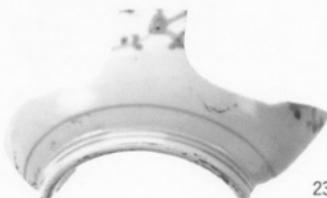
21



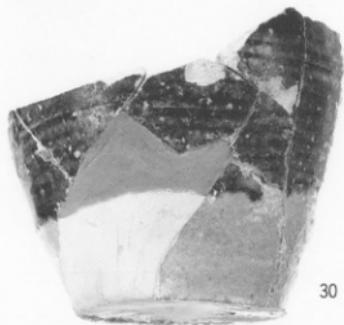
16



2



23



30



32



34



35



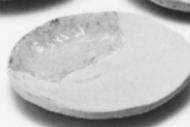
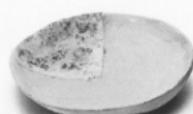
33



40



39



37



38



36



35



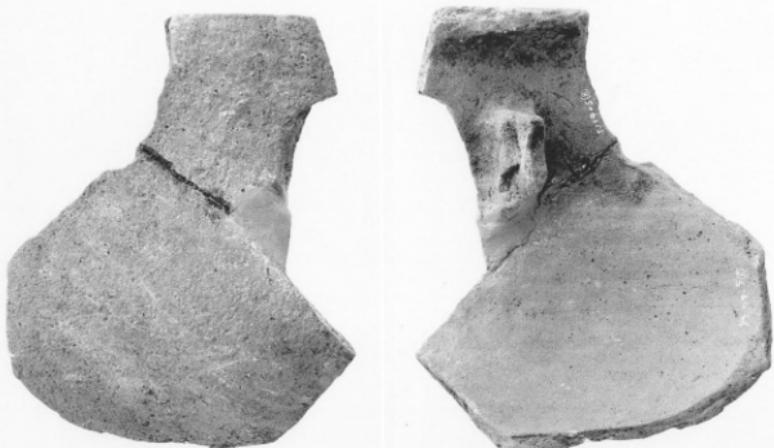
44



47



48



51

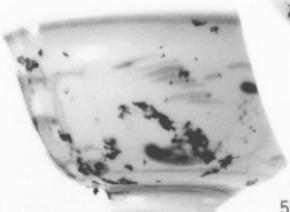


52

54



55



53



58



61



64

大阪狭山市文化財報告書19

府道河内長野美原線歩道工事にともなう
狭山藩陣屋跡発掘調査報告書Ⅱ

発行日 2000年3月31日

発 行 大阪府富田林土木事務所
大阪狭山市教育委員会

印 刷 橋本印刷株式会社

